

児島に生れた。東京歯科医専（現在の東京歯科大学）在学中、米騒動の時、大杉等の講演会で警官たちと渡り合ひ姿に「私の眼が開いた」と言っている。近藤栄蔵の「コミンテルンの密使」の中で、一九二一年十一月東京陸軍大演習に際して反戦ビラをまいて捕えられた事情を書き「武はおとなしい無口の青年で、歯科学生だった」と書いている。

註3. これは自伝の中の一部で、私としては上海當時のことを続けて紹介する予定だったのだが、原文のまま出す訳に行かないということもあり、多忙さに五ヶ月かかってやっとこれだけしかまとめられないでいた。武氏から原稿返還を迫られて、申訳なさに恥じいる。誠実な先輩武氏の御寛容を乞う。

マックス・ネットラウ図書館を訪ねて

戸 田 三三冬

（註）八月号に紹介した戸田三三冬「南欧からの手紙 エッリコ・マラテスタをめぐることども」のうち、マックス・ネットラウ図書館に関する記述を、筆者の了解を得て、転載しておく。冒頭部は原文を転載にみあうように少し変え、添付されている原語は割愛した。

戸田氏から寄せられた書面の前半を付け加えておくので、あわせて味読されたい。標題は文意にあうように私がつけたものである。（文責・若山）

マックス・ネットラウ図書館はP・O・マシーニガネットラウを記念して北イタリアのベルガモに開いている私設図書館である。この図書館のテーマは、無政府主義運動より更に広義の「解放運動」であり、労働者、女性、学生、芸術家、「言語、民族、宗教、性別、年令、教育、社会的・肉体的・心理的条件、のために差別されたる者」、兵士から囚人、僧までを含む人々の、自由・尊厳・独立の諸権利に関する史料の、収集・整理・保存を目的とするものであり、伝統的にカトリック文化の強いベルガモの町に、市民の手による「解放運動に関する勉学・研究の一センター」を設立・運営することは、それ自体、「自治の行為であり、創造的論争の行為」である、とされている。……

それは、畠の中に建てられた赤瓦の一軒家で、車庫の隣の入口に、「『マックス・ネットラウ』図書館」と小さく表示がある。一階は車庫と図書室（書庫・閲覧室）、訪問者の為の広い客室で、この中央から小さな廻り階段が二階に通じている。……私が「仏陀も広義のアナキス

トであるから……」と云つて、持参した永平寺の生活の英文解説附・写真版『禅仏教』を、図書館に贈ると、夫妻ともとても喜んで何か日本語で書け、という。私は少し困つて、「ネットラウ図書館を訪れた記念に」と書きサインした。……

ネットラウ図書館の活動について訊ねたのに対する答は、大略次のようなものであつた。

この図書館は公立ではなく、アナキズム運動、さらに広義の解放運動、リベルテールの運動に関する史料（新聞、雑誌、手書き草稿）の私的なコレクションを内容としている。私は常に、図書館に「アナキズム運動の歴史記録」という性格を与えるよう努力しているが、それは、この図書館が、すべての人々にこれを開放するスペースがなく、また、今日出版されつつある全史料（アナキズム、異議申立て運動、新左翼など）を集めることはできない、という限定された性格をもつからだ。

従つて、図書館は、アナキズムの起源——厳密には第一インタナショナル、広義には一九世紀——についての史料収集を第一義としている。収集史料の下限は一応、一九五〇年であるが、それ以後のものでも、一九五〇年以前に関する研究史料、例えばバクーニンに

関する書物などは、収集の対象となる。こうしたことは、専ら私が仲間の助力を得て図書館を運営しているので、大きなことは出来ない、という事実から来ている。しかし、私は図書館にある全定期刊行物のカタログを出版する準備をしており、これは来年、ロンバルディア州政府の肝いりで、刊行される予定である。このあと、パンフレット、単行本、手書き草稿（手紙や自筆原稿）の順に、カタログ刊行をすすめたい、と思つている。

既に図書館はカタログを五号出している。これらはこの図書館の草創を示している。図書館が活動を開始した時、私は、図書館に集まつて来た沢山の、それまで地下室に眠っていた史料に陽の目を見させようと、これらカタログを印刷したのである。

この書庫は相当のスペースがあるので、まだ豊富な史料が入る余地があるが、図書館の方針は、他の図書館にない稀少史料の収集にある。

カタログは、A4版のAート紙で見開き四頁、一九六九年から一九七四年まではほぼ一年に一度ずつ出ており、……第四号（一九七二年二月）の寄贈文献リストの中には、マラテスタの十四通の手紙（一九二一—一九三一年）も見える。第五号（一九七四年一月）には、「お知らせ」

として、図書館が最初の実験段階を過ぎて、無秩序や史料保存労働の過重、面積・財政の必要性の増大と云つたことを避ける為、文献・文書収集の範囲を限らざるを得なく、と云う問題に直面していること。この為、収集を、

一八六二年から一八九二年の時期、即、第一インタナショナル、パリ・コミューン、原生社会主義者たち、マルキシズムの理論的著作、社会問題についての諸議論、アナキズムの起源、及びイタリアについては統一後の政治生活の最初の三十年、の範囲に限定すること。この限定は同時に、図書館がその名を称しているマックス・ネットラウその人の研究目的に合致したものであること、を告げている。

戸田三三冬さんからの手紙

御丁寧なお手紙、ありがとうございます。「リベルテール」八月号に突然紹介がのり、いささかびっくりしているところでした。御同封の同八月号、「M・ネットラウ伝のために」「マラテスタの面影」それぞれのコピーもありがとうございました。ゆくゆく日本の諸誌にのせられたマラテスタの人となりについて調べてみたいと思つております。御好意、厚く御礼申し上げます。さて「マラテスタをめぐる子ども」抜粋転載の件、

一旦公にしたものですので、お役に立てていただければ幸いです。どうぞ御自由にお使い下さる。

「リベルテール」にはミッシェンの Augustin Souchy のところでもミラノの rivista anarchica の編集部でもお目にかかりました。また、フィレンツェの G.P. editrice では、日本人のグループがこれを売っている、と教えてくれました。スーシーは「リベルテール」の裏表紙に目次の英訳のついているものは、内容が何だか自分にも分かるが、それが無いものは見当がつかない、と言っていました。やはり、出来れば、少くとも目次は英語（ないしその他の横文字、エスペラント語など）を入れた方がよいように私も思いました。（後略）

石川・八太論争とマラテスタ

梅田 順子

八月号に紹介され、本号に一部分が転載された戸田氏の論文を読むことができた。ところどころにセンチメンタリズムが顔を見せているのはいかにも女性らしいというべきであろうか。マラテスタの影は遠く日本にまで及

んでいることは言うまでもなく、今後おそらくさまざまな角度からマラテスタ研究が進められるであろう。多分、重要視されるであろうその一つのテーマの周辺を見ておきたい。

本誌のバックナンバーの海外だよりの欄に綱領主義という言葉が二、三回出ています。内容については紹介がないが、この綱領主義をめぐる論争でもっとも活発に論陣を張ったのがマラテスタであって、綱領主義論争の波紋は日本にも押し寄せている。すなわち石川三四郎と八太舟三の論戦の一論拠とされているのがこの論争である。綱領主義論争というのは仮に私が名づけたもので、内容からして、サンジカリズムと共産主義的アナキズム（日本ではいわゆる純正アナキズム）の論争、組織あるいは過渡期をめぐる論争と言った方がベターかもしれないが、以下綱領主義論争とし、内容には立ち入ることなく、マラテスタを中心にして概観することしよう。数年後のマラテスタ歿後五〇年にこの論争の全体像を明らかにしたいと考えている。しかし、その前になおいくつかの資料を入手し、イタリア語その他をものになければならない。

戸田氏のマラテスタ文献探索の記録の転載にあたつてまともにはつかないままであつても、他に機会が当分な

さそうなので、この小文を大急ぎで添えておき、他日の研究のためのささやかな第一歩としたい。

二

もつとも入手しやすいマラテスタ伝はV・リチャーズのものである。この伝記に綱領主義に関する記述は本文で一行と少し、誤植つきの注で一つある。二二七頁の「：一九二七年の修正主義者たち（マフノその他）」との隠やかで非妥協的なボレミック」という本文がそれであり、二四二頁にある注五五がそれである。リチャーズがどの程度この論争を知っていたか、なぜもつと詳述しなかったのかはむしろ推測の域を出ない。特に、リチャーズ夫人の岳父であるカミッロ・ベルネリもこの論争に一枚加わっているだけに、そして、マラテスタのこの論争における役割を考えると、不可解といわねばならない。もつともベルネリ著作集とでも称すべき『クロンジュタット一九二一年 パルセロナ一九三六年』にはベルネリの該論文は収録されていないから、一般的に、取るに足らない論争と考えられているのであろうか。たとえマラテスタ伝執筆の当時そうであつたにしても、現在ではそうでないことは、リチャーズの足もとで本論争についての最重要文献が最近英訳されていることから判断しうるのではないかと思う。

綱領主義論争の出発点となつたのはアルシーノフを中心とするグループの発表したパンフ『無政府主義者総連合組織の趣意』（この標題は石川訳）である。これが一九二六年六月、その補遺は一九二六年十一月でありヴォーリンたちが反論し、再びアルシーノフらが筆をとつたのが一九二七年、そして、マラテスタが論戦に加わったのがやはり一九二七年である。以後はもっぱらマラテスタが中心になつて論争が展開されていたようであり、私の今までに収集した資料のうちマラテスタ関係は次の通りで、いかに活発な論争であつたかが推定できよう。

A パンフレット一種

現在、黒色戦線社から復刻されている『無政府主義組織論』がそれで、元来はイタリア語で雑誌に発表された論文。邦訳はドイツ語訳からの重訳。

B 雑誌論文一本

O 雑誌に発表された書簡三通。

- 1 ジャン・グラヴ宛。
- 2 ネストル・マフノから。
- 3 ネストル・マフノ宛。

右の五つの論稿の執筆年は一九二七年から各年で一九三〇年までである。マラテスタの著作集を逐一調査すれば他にも論稿はあると思う。マラテスタの歿後も論争は

つづいており、マラテスタのものではないが、関係文献の英訳もいくつかある。むしろ他国語への翻訳もかなりあり、原語と原標題を確定するのすら難しい作業で、様々の翻訳が全部か一部の確認はそれ以上に困難である。私の入手した資料のなかには不鮮明な印刷のガリ版刷りのものがあつて、読むのには多くの時間が要される。語学の障害を度外視しても、綱領主義の全体像を把握するためには、まさに血のにじむような努力が必要とされるけれども、それに値するだけの豊かな内容のある論争である、と私は確信している。

三

マラテスタないし綱領主義論争が石川三四郎と八太舟三の論争にどのような影響を与えたか。一例を見ておこう。

石川三四郎はその著『無政府主義とサンジカリズム』のなかで、前掲の『趣意』を自己の一論拠とし、「サンジカリズムの弁護のために引用」（八太舟三）し、他方、八太舟三は論文「我等の進むべき途」で『趣意』を批判したマラテスタを自己と同意見であろうと引照している。ここで注目すべきことは、石川も八太も西欧の論争を祖述したのではなく、単に自分の主張を補強するために使用したということである。つまり、時をほぼ同じくして

西欧でも日本でも同じ論争が行なわれていたのである。共通した論点と取りくまなければならなかった思想的、社会的背景がそこにあったはずである。それが何であったか、そして西欧と日本の両論争の力点のおき方の相違はどこにあったか、西欧の論争が日本の論争へどのような波紋を及ぼしたか等々の説明はまさしく今後の課題である。

八太が上の論文で言及したロッカーには『アナキズムと組織』というパンフレットがあり、これは翻訳されている。内容からして綱領主義論争の産物とは思えないものの何か関係があるかどうかもわからない。原書に刊行年が書かれていればある程度は推測できるけれども、これまた今後の課題である。

（マラテスタ『無政府主義組織論』は上述したようにドイツ語訳からの重訳であって、ドイツ語への訳者はフリッツ・エルターです。エルターには他にいくらか著述もありますが、「われらのバクーニン」という詩の作者でもあります。この詩は昨年リベルテールの会の刊行した『われらのバクーニン』の冒頭に拙訳が掲載されていますので、興味のある方は参照して下さい）。

している」から。

企業は多くの仕事をつくり出すという積極的な意義を強調しているが、それはまちがっており、企業だけの経済学を使って大局的な真理をごまかしている。社会は黒人にも白人にも同じ機会を与えるようになり、歴史と事実は常に変っている。企業は南アフリカの経済政治構造内でのアメリカ企業の演ずる特殊の役割を意に介していないし、企業と南アフリカ国家との間の関係をおおいかくそうとしており、南アフリカに企業が存続するかぎり社会は安定していると思っているが、「南アフリカの黒人は現在の体制の全面的変革を期しているのである」。そして、デービスはカルテックスとモービルの二つの石油会社のアフリカにおける活動を分析している。

C・レインクラウズ「土着の住民に対する化学戦争」から。

これは南北のアメリカにおける化学的な公害を取り扱ったものであり、この論文の中では水銀公害の原因の発見をゆがめ、公害を広めた例として「ミナマタ病」、「チソ」(「ホリカワ博士」)などに言及している。

海外からの情報としてはミルトン・フリードマンがノーベル経済学賞を授賞したことに批判的な記事が転載されている。フリードマンの経済理論を実践するのに理想

●海外だより

※ 「ウイン(勝利)」という英文の週刊誌がある。

サブタイトルが「非暴力行動を通じての平和と自由」とあり、リベルテールに送られる諸誌の中では異色のもので、思想誌というよりは運動誌である(強いて区別するならば)。最近号のいくつかから論文の題名をあげただけでおおよその見当がつこう。

「土着の住民に対する化学戦争」

「B1は去ったが、忘れられたのではない」

「人民にアイスクリームを」

「原子力? まっぴらごめん」

「アメリカ企業がアバルトヘイトを助長している」

「核反対。オレゴンの勝利」

「北部のエネルギー闘争」

本誌の特徴は冒頭に全世界からの読者の手紙を掲載し、同種の運動に関する多数の情報を集め同時に連絡場所を併記していることである。

最近号から内容をいくつか要約または抄訳しておく。

J・デービス「アメリカ企業がアバルトヘイトを助長

的なのは、一八〇〇年代のアメリカであるという。「この国の三分の二が奴隷で、残りの多くはインディアンから土地を盗んでいた」ことを都合よく忘れ、フリードマンは偉大な個人的な自由の時代であると述べているのである。同じ賞を授賞したM・フリードマンも批判的なコメントを発表しているという。

※ 外国への日本紹介について二、三記しておく。

ベネズエラの『ルター』はV・ガルシア「ゴドウィンとブルードン」という長文の論文を発表しており、そのなかで安藤昌益を近代アナキズムの先駆者としている。典拠はH・ノーマンである。この『ルター』はかつての新聞版でなく季刊の雑誌で第二期とされ、以前「幸徳、大杉、山鹿。日本の三人のアナキスト」を特集したことがある。この最近号に日本のアナキスト誌の一覧表があり、それには以下があげられている。「リベルテール」(八千代)、「らじかる」(東京)、「アナキズム」(富士宮)、「リベロー」(京都)、「イオム」(神戸)、「サルートン」(大阪)。

前号には三浦精一「石川三四郎と私」にドイツ語、ポルトガル語があることを記しておいたが、エスペラント訳もあり、「リヴィスタ・アナルキカ」には黒沢明の映画評が掲載されている。

※ 商業紙の『ニュースティツマン』（六月二四日）はヒュー・トーマスの「スペインのルネサンス」を載せているが、アナキズムもON Tも完全に黙殺されている。ホセ・ペイラーツやガストン・ルヴァルの大著が次々と英文で出ている（英訳か原文が英語なのかはわからない）のに、さらに、ドルゴフやブクチンという気鋭のアナキストの英文オリジナルがあるのに、不思議というほかはない。

（編・梅田順子）

一 波 万 波

☆（かねて高橋君から連絡のあった宮本礼子さんの原稿がきた。リベルテールがこれを取り上げることは、宮本さんがその青春の情熱をかけて共に戦った赤軍からの批判があつたりするのではないかと思つたが、僕としては、宮本さんがその純な青春を賭けたのは、この社会の不正、不条理に対してであることを知るからだ。こうした若い情熱に対して分別くさい考え方や、権力集団の批判など「クソクラヘ」だ。尊いのはその青春の情熱だ。社会の不条理に対して立上つたその純な心だ。たまたま、その前に赤軍があつたに過ぎない。人間の行動はいつでもそ

の前にあるものを通じて、それとともに展開されてゆく。その前に他のものがあつたら、また異つた展開があるだろう。ここに人間の「出会い」とか「縁」とか呼ばれるものがある。僕はこの宮本さんの文を再読三読して貰いたいと思う。）（三浦）

☆七月の始め、高橋さんより、リベルテール五月号入れていただき念入りに読ませていただきました。今まで知らなかった事ばかりが書かれており、勉強になりました。それで、七月の終りに面会に来て下さつた時、続けて読みたいと申しましたところリベルテール誌の今までのもの約二〇冊と機関紙三部入れて下さり、今、検閲に回っており、まだ手もとに届かないのですが楽しみに待っております。

不当にも、差入れがあつてから手もとに届くまで一週間ばかりかかります。

「政治力で社会主義の目的を達成しようとするのは実に半分の社会主義だ」と書かれていましたが、私も同感です。

革命とは、ピラをまいたり戦斗をやつたり学習をやつたり。このいわゆる（あえて分ければ。）政治的な意識と行動の変革だけではなく生活領域総体——文化、性、女と男、生活形態、芸術、文学、親子関係、人と人との関り、被差別者との関り。——あらゆる領域での意識

と行動の変革を一体化したものでなければならぬ。生活領域での古い誤つた意識と行動（「家」制度——一夫一婦制、差別、社会主義リアリズム、親子ベッタリズム及断絶、命令・従属など）を変えようとする努力を怠つて「政治」活動だけをやって、それは封建主義と差別の固りではなく、反対に切り捨てての事の出ないものを切り捨てたかのように見せかけているが故に禁欲主義に陥り、又、だからこそ悲壮感を持ち、だからこそいよいよ決意をしなければ何もやれない、そして大げさな決意のわりには大した事はやれない。

そうではなく、社会革命と生活領域総体の革命の一体化、政治革命をやつてから文化革命をやるのではなく政治革命と文革を同時にやっていくトータルな質こそが、革命の実質的な内実ではないかと思ひます。（中略）

：うまくまとまらないのですが、△結びつき方▽競争の避け方▽71年のはじめに同棲時代と訣別して、考え方がちがえば、生き方もちがう、愛と思考は一体化したものだと思ふようになって、人と人とは必要と必然性に基いて分離結合するのが最もラジカルで本質的な生き方であり、新陳代謝が激しければ激しいほど、その人間が發展している証拠だと今は思っています。人と人との関係ははじめからあるのではなく、自己自ら思考し行動す

ることによつてはじめて作られる。何事も自分の問題としてとらえようとせず、やらない事（ロボット）も、深く自分の問題としてとらえようとせず、やりもせず他人にとにかく言いたがる事（ダニ）も両方ともまちがいで一人一人の人間が自己のあり方を問い、自己改造しつつ、地道にコツコツ積み上げる努力をし、あくまでもこの二点を軸に相互点検→相互変革しつつ共闘してゆく事が、団結なり、連帯の原点だと思ふ。（中略）

：協同体について、共同体（共同生活でも組織でも）それに関する個々人の全的存在を体现できる空間でなければならぬ。しかし現実はそのようではない。私は私であり、私であり続けなければならない。やはり闘争しかないと思つて71年（一年間日和つていた）同棲時代と訣別したのですが（露出症で気がひけるのですがやはり自己をふまえない言葉はむなし）この時の自己の全的存在の体现とは何だったのか、芸術だの何だのと称して（芸術の否定ではなく芸術家のあり方の問題）親と女に寄生する男と、生活のために「働くために働く」ような女。働くために昼・夜と時間をとられて、やりたい事もやれず、これでは自分がダメになると訣別した女。そこでの男は、エゴではなく△自分の道▽だったが、現実問題として他者の生を抑圧するエゴでしかなかった。そこで、

「花も嵐も踏みこえて、ゆくが男の生きる道」ならば花も嵐も踏みこえて、ゆくが女の生きる道だと思つて決別した女。愛とは相手を殺して自分が生きる事である。

共同体の中で、他人の生を抑圧した男が、今度は自分が突き離されると「言うだけ言つてそれでもわからん時は実力でやる、これが暴力だ、おまえがそう言った」と暴力で迫る男。これは愛とか未練でなく、相手かまわぬはた迷わぬエゴである。そこでの私は何だったのか、「私は（自我）、これをやりたい」、しかしやれない空間だった、だから別れた、これはエゴではなく自分の道だった。「同じところにいて、二人とも絵をやる」と競争するから」と私が描くのイヤがついていた男は、今考えると、競争するどころかが破壊する事を知つていたからだと思う。しかし競争する事によつてどちらかがつぶれる事はあつても、その過程では両方が、延びる。エゴ（利己主義）と主体性は、どちらがうのか？エゴは、自分だけ、自分さえよければ。

主体性△自分の道▽意思・信念。どちらも、自分△が根底にあるが△自分の道▽は、自己の自主性と主体性に基いて自ら立ち、自分の手で自分の中に緊張感を作り実践し、それは何ものによつてもおさえつけられてはならない。真の共斗（共同性）とは自立△自律△自由の事

だと思ふ。

協同体の部分を読み、過去の「共同体」「共同生活」がオーバーラップし書いていたのですが、これも自分の体験だけでなくワクを広げて社会に置きかえて考えないといけないのだと思ひました。これが、「共同体」と「共同体」のちがひなのです。

露出症の押しつけのようで恐縮です。ただ、いきなり広げてわからないので、まづ自分の中で自分に引きつけてとらえたかったのです、そうでないと浮いてしまうような気がしたので。八・一一（宮本礼子さんより）☆リベルテール八月号アリガトウ。拙稿ノ掲載ニ感謝シマス。（江川允通さんより）☆送金どうもありがとうございました。リベルテールも毎月どうもありがとうございます。

リベルテール、時々英文や「中国語」の部分がありますが、これが最近、自費で翻訳して「検閲」して戴かねばならず、約五〇〇〇円程かかるということとで残念ながらこの部分だけ読んでおりませんが、他の部分は毎号読ませていただいております。

外国語は、仏語と朝鮮語が一応区切りつきまして、今はスペイン語と英語だけやっております。スペイン語は参考書の34程終了しました。出所までにはなんとか終ら

せたいと思つております。英語の方「THE ANTI-RATIONALISTS」という本を読んでおりますが、こちらはあと何ヶ月かかるか見当もつきません。それでは又皆さんお元気で。

9月11日（函館、清水君より）

中国無政府主義試論（7）

志麻達夫

劉師復

資料（2）劉思復と中国アナキズム

「民声」はもと劉思復と呼ばれた劉師復の個人的な創造による所が大きい。23号には、彼の伝記が含まれているから、ここで詳述するには及ばないだろう。たゞ言えることは、一九一一年の革命（辛亥革命の事一訳註）前の彼は、暗殺に特別な興味を持った活動的で勇気のある革命家であった。一九一一年以後、彼はその短い生涯を中国におけるアナキズムの宣伝に捧げたのである。その仕事で彼を助けたのは、鄭彼岸、雲鵬、莫紀彭、林君復、その他であった。師復以外のこのグループの多くの人、香軍の指導者であった。それは革命軍で清朝から香山を解放したのだ、師復とその仲間の人達がやった宣

伝方法の一つは、人間的な例示であった。一九一二年彼等は心社という結社を作った。そして会員には非常に簡素な生活をするよう主張したのである。広東在の本部から、会規十条を記した一万部のコピーが配布された。それは中国全土に深い感銘を与えた。文書宣伝も重要視した。西欧のアナキスト文献を翻訳した数種のパンフが発行され、「民声」はそのキャンペーンの一部を担ったのである。

一九一二年、師復は海鳴学舎の名で知られる教育と宣伝のための結社を創設して、次ぎの年、海鳴学舎の記録を海鳴録として出版し、また「平民の声」とも題した。この雑誌は中文とエスペラントの部があり、後者を「Voco del Popolo」と題字をつけていた。一九一三年八月二〇日と二七日に二号出した。九月七日（莫紀彭が広東を占領して（孫文派が起した第二次革命の失敗のため）師復と仲間はマカオへ通れた。そこでこのグループは第三号を、一九一三年二月三日号として出した。この時から雑誌の題字を「民声」とし、エスペラントの題字を「La Voco De La Popolo」と修正した。袁世凱政府はポルトガル当局に働きかけ（アモイはポルトガル租借地）師復達はまた移らなければならなかった。

次に民声社の事務所を上海の國際租界に創設した。しかし雑誌が實際に何処で印刷されたかは疑問がある。4号から22号までは東京で印刷されたと表紙に記している。しかし師復の仲間が記述したのによれば、彼はその雑誌に書き、編集しただけでなく、四人の姉妹の手助けにより、自分で植字したという。というのは自分の仕事を他人にやらせるのはアナキストの信条に反するからだった。この記述は信用できるから、そうだとすれば外國の住所名は法的支障を避けるためだったのであろう。民声第四号は一九一三年二月二十七日となっているが、多分それ以後発行されたものであろう。第五号から第二号まででは一九一四年四月〜八月まで週刊で出された。この時期の師復は、上海と広東での無政府共產主義者グループ (Anarchist Communist Group) の創設にあたって、主導的な精神として活動した。しかしその年の秋、過労と厳しいスパルタ的生活、そして結核に犯され、彼の健康が損われ、一九一五年三月二十七日、死去した。

子林君復が発行した。更に一九一六年中には上海で、三
号分が間を置いて出版された。一九二一年まではあとに
続く発行がなかった。しかし民声社は少くとも一九一七
年中は、アナーキストのパンフレットを出版し続けたの
である。

中国で西欧のアナーキズムを最初に宣伝したのは師復が初めてであつたのではない。張継^{チヤウキ}は既に一九〇三年、無政府主義に同情的な論文を翻訳出版した。一九〇七年、一九一一年の期間中には中国無政府主義の二つのセンターがあつた。その一つは劉師培^{リウシハイ}と妻何震^{ハハチン}が二誌「天義^{テンギ}」と「衡報^{ヘンポウ}」を東京で発行した。この雑誌では幾つか

の西欧の勞作の翻訳が含まれている。優れた古典學者だつた劉師培は自己の無政府主義を中国の思想家、許行（シヤン、パシエン）の思想に求めた。また彼は親友の章炳麟（ヤウ、ビョリ）と同じく仏教の影響を受けている。

一九二二年二月、吳雅暉、李石曾、張繼は進德會を、道德の推進を目的として創設した。この結社は師復の心社に似ているが、もつとゆるやかであつた。その他の事では、この主導的な人達は、政治にまき込まれないことを誓つたが、結局、政治的生涯を抜け出られなかつた。師復だけが政治を拒否して一貫した無政府主義の指導者であつた。その為、彼は当時、無政府主義にひかれる多

くの人びとの尊敬を受けたのである。彼の個性、活動、宣伝は、広東における無政府主義者の確固とした根拠地になった。不断の圧迫にもかかわらず、無政府主義の労働組合と文化的グループは一九三〇年代、それ以後も存在した。陳炯明は彼を尊敬し、師復の弟子達を敬愛したから無政府主義は中国南部で五四運動期に重要性を増した。^{チャンチュ}漳州では梁泳紘^{リョウエイシヨウ}によつて新運動が展開された。彼は師復の弟子で、陳の教育長を勤めた。^{チャン}漳州での無政府主義への傾倒と全中国をゆるがしたロシア革命への傾倒は、中国共産主義運動初期での重要事である。陳が無政府主義者に同情したため、彼の支配下にあつた地方ではラジカルな思想を容認し、勇気づけた。陳^{チャン}独秀は広東に招聘され、そこで「新青年」^{シンチヤン}を再刊した。しかし一九二一年、独秀は無政府主義を攻撃し、近來青年中頗流行的無政府主義^{キズム}（近頃青年の間ですこぶる流行しているアナキズムに就て）と題して論文を書いた。これに対し、民声第三〇号では^{オシエイバイ}区声白の反論の幾つかも収録している。こうした訳で、師復と民声は中国無政府主義史にとって重要であるばかりか、廿世紀の中国ラジカル思想全体としても重要である。」

ケンブリッジ大学 一九六七・夏
(出典「民声」雑誌影印本代序)

— 18 —

野火

(江藤・編)

(ミニコミ紹介)

▽『薫風』創刊号、8月25日、薫風編集委員会(千葉県山武郡芝山町大里107)、50円。(主な内容)東山薫虐殺糾弾裁判闘争に向けて、三里塚と水俣、薫さんと出会うために。「まぎれもなく、東山薫を直撃したガス弾は、脳しょうが流れ出るほど彼の頭蓋骨を陥没させただけでなく、俺達一人一人の脳天に、鉛の様な重さをもつて今も、深く突き刺ったままだ。国家権力―機動隊のガス銃の筒先は、東山薫だけに向けられたものではなく、三里塚闘争総体と全国の闘う人民の全てに向けられたものだ。そうであるが故に俺たちは、その銃を奪い取るような闘いを組み、俺たちの脳天に深く、重く突き刺さったままのガス弾を俺たち自身の手で抜きとらねばならない。それが権力に対する俺達の虐殺糾弾の闘いであると思う。千葉地裁は、5月13日の告訴状提出以来、両親、反対同盟を初めとする度重なる参考人の出頭、又司法解剖によって、「新型ガス弾による直撃」と、その事実が明らかになっているにもかかわらず、その後、三ヶ月を経た今

日に至っても、新型銃を使用した二人のうちの一人である犯人を、いまだ起訴しようとしていない。そして、その事に対して「現在捜査中である」としか答えない地検の態度は、俺たちにとって、この事を世論の中で忘れさせ、陰ペイしようとするものと思えない。俺たちは、この問題を絶対にうやむやにさせてはならないのだ。権力の犯罪に時効はないという事を思い知らせてやるしかないのだ、という決意をもって、この「薫風」を発刊するものである。」

▽『TAIWAN―台湾の政治犯を救う会ニュース』創刊号10月5日、200円、(連絡先)小金井市梶野町4-10-28高杉荘3号。(主な内容)台湾キリスト長老教会人権宣言と緊急集会、釈放後も軟禁状態にある謝聰敏氏、アメリカにおける台湾人権擁護運動の動き、台湾における人権弾圧の現状、11月の台湾一斉選挙に注目を。――なお最近台湾人権問題の資料集ができました。右記「救う会」で扱っています。「台湾の人権問題に光を」(アムネスティ・インターナショナル第5グループ編集、400円)(主な内容)台湾―暗黒の中の政治犯(アイロンドン本部報告書)、AIの最近の救援活動―劉貞松、謝聰敏、陳明忠のケース、知られざる台湾人民の闘い(川久保公夫)、戒厳令の解除を(張声)、蔣経国院長の

人権宣言に反駁する(李宣如)、最近の拷問例―王幸男事件、緑島という名の監獄島。

▽『緑のふるさと通信』第6号、7月25日、緑のふるさと東京事務所(新宿区高田馬場1-4-9平和マンションA棟43)、100円。(主な内容)ユートピアと育児(新島淳良)、川のあるさと、塾の論理。なお、矢追日聖(大徳紫陽花屋)、新島淳良(ヤマギシ会)、大山八三郎(チェンマイ・ハンディクラフト社)共同提案、日本協同体協会、一燈園、新しき村、阿寒学園村、アジア学院、弥栄之郷共同体、フレンズ世界大学など賛同の「ひとりひとりの人間のための「緑のふるさと」提案書」では、「ひとまず議論はやめて、ここによりよい快適な人間社会のヒナ型をつくって見ようではないか。もし、そこに住む人々が、お互いの愛と信頼をキズナに、本当に豊かで快適に、ひとと羨むような生活をおくっているならば、ひとびとは納得するだろうし、参加者も増えるだろう。あるいはそのようなものが、他所(よそ)にもできるだろう。すなわち、これが、ショウウィンドウとなって、日本の国そして、世界の人間社会がよりよいものに変っていくのではないか」と考えて、「五十年の展望に立つて幸福な社会の実験に着手することを提案」しています。そして、「仲良しモデル村―仮称「緑のふるさと」―では、五十年以内におこりそうなこと」、「食糧自給の問題、エネルギー問題、老人・障害者・福祉の問題などを自力で解決できるように話し合い」、「一人一人の持ち味」

を活かし、「特色をもった共同体の自由な連合」をつくり、「適正な規模をつた」地域「社会」をめざし、「新しい生活の質」をつくりだし、「つぎの世代」を育て、交換経済と贈与経済を組み合わせた「村」の経済によって物質的にも豊かにする、と計画しています。これは「どこまでも合法的に」すすめ、「日本のすべての政党」、「全世界の政府」によびかけるとしています。

▽『遊撃』80号、9月1日、さかさのイシ発行の詩、評論、随筆、読者のたよりなどを載せた個人誌。小金井市中町3-12-22直良荘仁号長谷川修児。(主な内容)8・15と私たちの現状、統・奴隷の言葉―差別社会と福祉の論破、小西反軍裁判の会から。

(その他リベルテールに送られたミニコミ)

▽『ほんじゃまあ』23号(篠田修個人誌)。▽『障害者新聞』20号(ハガキ型、「あるスモンの会の討論」他)。▽『けんさん』8月号(ヤマギシズム出版社)。▽『月刊協同体』8月号。▽『かにた便』8号(かにた後援会)。▽『風見鶏通信』324号。▽『三文評論』再刊の御挨拶。▽『風だより』10号。▽『ZAKOニュース』40号。▽『WRIウリ・ニュースレター』40号(平和行進参加総括特集)。▽『高い壁』94号(「土田邸、日石郵便局、ピース缶爆弾」フレイムアップ事件統一救援会)。▽『小西反軍裁判通信』1号。▽『ARS』172号(詩集)。▽『人間改造』1021号。▽『民主経済』222号。▽『政治経済情報』9・10月号。他。